

太陽が強くぶり注ぐ中、朝早くから沢山の人々が集まつた。今年も『こもろ日盛俳句祭』が開催される。期間は七月二十七日(金)～二十九日(日)の三日間。第四回目となる今回は約百四十名の方が参加される。中には皆勤賞という方もいて毎年楽しみされているそうだ。集まる人はみんな笑顔でこれから始まる俳句祭にわくわくしている雰囲気が伝わってきた。

午前中は浅間山荘コースや三十分ごとに市役所を発車するシャトルバスに乗つてマンズワイン、布引観音、高原美術館などを巡りそれぞれ好きなところに赴いて、一時から始まる句会にむけ一人五句ずつ作つてくる。

俳句は五七五、計一七文字という短い中に季語や切れを使って描写された風景とともに心の情景を表す。青い空に大きな入道雲。日差しは強

ら沢山の人々が集まつた。今年も『こもろ日盛俳句祭』が開催される。期間は七月二十七日(金)～二十九日(日)の三日間。第四回目となる今回は約百四十名の方が参加される。中には皆勤賞という方もいて毎年楽しみされているそうだ。集まる人はみんな笑顔でこれから始まる俳句祭にわくわくしている雰囲気が伝わってきた。

午前中は浅間山荘コースや三十分ごとに市役所を発車するシャトルバスに乗つてマンズワイン、布引観音、高原美術館などを巡りそれぞれ好きなところに赴いて、一時から始まる句会にむけ一人五句ずつ作つてくる。

俳句は五七五、計一七文字という

いけれど、不快な暑さではなく夏をカラダで感じる。緑に囲まれときどき吹く風に爽やかな気持ちになる。私たちは取材をするためにカメラを構えその風景を切り取つているのだが、俳句では文字で風景を切り取り取るだろう。同じ場所、同じ風景でもそれを見る人によって違つたものになる。十人十色。百四十人、七百句。どんな俳句ができるのかとても楽しみである。(大川)



日盛俳句祭

季節に詩を



2012年
(平成24年)
7月27日
金曜日

こもろまん編集部
発行所: 小諸市民会館
komoroman@vanotica.net
第十三号

新しい風が吹く

俳句祭には、我々大学生の他に

も、地元の高校生がボランティアとして去年から引き続き参加をしている。今日は小諸商業高校の高校生がスタッフで来てくれた。私は会場受付・投句用紙を配る係を、女子生徒の皆さんと行った。会場に訪れる人

びとに「おはようございます!」と明るく挨拶をし、迎え入れる彼女たちの笑顔は、会場にフレッシュな風を吹かせていた。話を聞くと、彼女たちは今回が初めての参加とのこと。初めて来る会場の雰囲気に、最初は緊張の面持ちで居ながらも、参加者を迎えていた。時間がたつにつれ、同じスタッフである私たちとも打ち解けてきた。俳句祭について、私たちが発行する「こもろまん」について、興味津々に聞いてきてくれた。そして、今回のスタッフはどうだったかを聞いてみると、「参加の方に自分から話しかける

ロマン小説 第十二話 すみれ

瞬目が合う。初めて会ったはずなのになぜか懐かしさを感じた。

高校最後の夏休みは小諸で過ごす初めての夏だ。小諸の夏は日差しが強く、昼間は歩くだけで汗ばんでくる。午前中に用事を終えて、家まで坂をゆっくりと上る。大学を受験したまま東京に帰るのかしら、先生が言つていた名前の由来を聞かなければ、などいろいろなことを考えながら歩いていると、向こうから坂を下つてくる人が見える。私と同じくらいの歳で、日に焼けた肌が黒く、背の高い男の子だ。初めて会う人のなぜかその男の子から目を逸らすことができない。彼が坂を下つて近づいてくるにつれ、心臓の音が速くなるのがわかる。すれ違う時に一

(次回へ続く)

のがなかなか大変だった」という感想がかえつてきた。初めての経験に始めは戸惑いつつも、この俳句祭の場を楽しんでいたようである。最後にはリラックスして参加の方・スタッフと楽しそうに話をしていたのがその証拠である。最後は、入り口にある日盛りTシャツと一緒にポーズをとつて貰い、写真を撮つた。明日は、違う高校から生徒さんがスタッフとして参加をしてくれる。これを読みの皆さんも、明日はどんな新しい出会いが生まれるのか、是非楽しみにして頂きたい。(相原)





小諸駅構内、改札前的一角にお惣菜がずらりと並べられていた。サンドwich、おにぎり、ジャムパン、焼きそばパン、大根の煮付け、ゆでたまご。焼き魚を出すこともあららしい。そこを通る人びとは、足を止めてはその店のおばあちゃんに話しかける。藤谷昌子さん。温かい雰囲気の優しげな方だ。もともと駅舎の2階で大きな食堂を営んでいたが、小諸駅建て替えの話に押され、お惣菜は1階でのティクアウト販売だけに縮小された。

駅周辺には、雰囲気のある親しみやすいお店や公園はあるものの、たしかに少し寂れていて人通りの少ない印象である。小諸の古き良き情緒を残しつつ、人が盛んに出入りする街になればと願っている。(中田)

小諸駅に お惣菜あります

駅舎建て替えは、2009年にスタートした事業であり、駅前広場の整備や周辺施設のバリアフリー化を目指すものだ。藤谷さんも「どんどん人が減り、寂れています」と言う小諸駅周辺を、再び街の顔として蘇らせることが目的である。

藤谷さんは長野県の松本で生まれ、他の市や東京など、7回の引っ越しを経てここ小諸にたどり着いた。今まで暮らした土地の中でも4、50年間を過ごしている小諸が最も好きな場所だと言う。「野菜が美味しいくて、生活には困らないよね」と笑っていた。別れ際に、ルバーブというフキに似た野菜で作ったジャム入りのパンをお土産として持たせてくれた。



残しながら 変わっていく 小諸の街並み

ここ数年の間で、小諸駅周辺の街並は少しづつ変わってきた。もともとJRの官舎があった小諸駅の北側には停車場ガーデンが作られた。そして、今年6月には公園内の芝生整備が進み、新たに設置されたロックガーデンは公園を一層鮮やかなものへと変えた。彩り鮮やかな植物に囲まれた公園は、街の新たなシンボルとなっている。今後も公園の開発には意欲的であり、停車場ガーデン以外にも新たな公園がまだまだ増えていくようだ。変わってきたのは公園だけではなく、商店街も大きな変化

歴史的な建造物が数多く残る小諸の街だが、歴史を残すだけではなく、新たなまちづくりにも力を注いでいる。今後も公園の開発には意欲的であり、停車場ガーデン以外にも新たな公園がまだまだ増えていくようだ。変わってきたのは公園だけではなく、商店街も大きな変化だろう。

ここで一句 アイスさ ため息さ さかな

こもろまん編集部がある小諸市役所で、アイスの差し入れを頂いた。袋から出したアイスがふわっと白い冷気を出し溶けていく様子を見て、アイスが小諸の暑さにため息をしているように見えた。俳句祭期間中は暑い日が続くようなので、参加者の皆さんもしっかりと暑さ対策をすることをお勧めしたい。(高木)



る。俳句づくりに夢中になると駅前の大門は意外と見えてこないが、歴史を残しながら進化していく小諸駅前を改めて感じてみてはいかがだろう。(佐藤)